

## 「夢の自動田植機」

今から五十年以上も前のことでした。二反<sup>にたん</sup>田<sup>だ</sup>春<sup>はる</sup>三<sup>さん</sup>が、田植えを機械でするからと聞いて、見に行きました。今の広町の両谷自治会館前四つ杭<sup>くい</sup>筋<sup>すじ</sup>の西側の田んぼでした。田んぼでは、すでに二反田さんが田植機を構えて待っていました。しかし見に来た人は五、六人でした。きつと田植えを機械でする事などうそだと思つたに違いありません。それでも二反田さんは臆<sup>おそ</sup>することなく機械の説明をした後、実際に機械で田植えを始めました。田植機は少しずつ前進を始め、機械が進むとその後には苗がちゃんと植えつけられています。見物していた私たちは、

「おー！」

と、感嘆の声を上げたものです。しかし惜しいことに、五つくらい植えると一つ植え損ねてしまうのです。五つに一つ飛ぶのですから、全体としてはかなりの数になります。結局そこは手植えでしなければなりません。また、植えつけられた苗の中には、横に倒れたりしているものもあり、見ている者は「やっぱりダメか……。」

という気になりました。さらにその田植機は前一輪車でしたので、やわらかい田の中では直線に進むことは困難をきわめました。

「あれじゃあのう……。」

ということになり、その実験は散会<sup>さんかい</sup>となりました。

(広郷土史研究会 会報第96号より抜粋)

その当時の広町は、周りはまだまだ田んぼや畑が広がっていて、農業で生活をしていた人たちがたくさんいました。特に田植えは一年のうちで最も忙しい作業で、近所の人たちが集まり、順番を決め、共同で田植えを行っていました。もちろん苗は手作業で植えられ、子どもたちも総出で手伝わなければならぬほどの重労働でした。

(私たち日本人は、ずっとお米を主食としてきた。でも、農家の人たちの過酷な作業は何百年も変わっていない。何とかできないものか。)

江田島市出身で機械の設計が好きだった二反田春三さんは、姉を頼って北海道から広町に移ってきてから自動田植機の発明を考えていました。手作業による労働を機械が代わってすれば、人々を重労働から解放できます。このような機械を「省力<sup>しょうりきよく</sup>機械」と言います。

春三さんは、田植機の設計に没頭しました。そして田植機に関するたくさんの特許を取りました。「二反田式田植機」です。

しかし、その試作機の実験をするたびに不都合が出てきました。何度も何度も歯車を改良したり、造り替えたりしました。当時広町には歯車を作る工場がありませんでした。そこで春三さんは東京や大阪など、遠くまで部品の発注に行かなければならず、製作費だけでも大変な費用がかかりました。そのほとんどは私財を投じてのものでした。

そんな春三さんの行動は家族にとって、とても賛成できるものではありませんでした。

（家族の生活も考えてほしい。できるかできないか分からないものに熱中するよりも、家族の生活を支えるようなことをしてほしい。）  
と、考えた家族や親類とはよく衝突しました。

春三さんは自分の部屋に閉じこもり、ぼんやり設計図を眺めました。彼は常々、家族や周りの人たちに、

「現実から学ぶことが大切だ。」  
と言っていました。

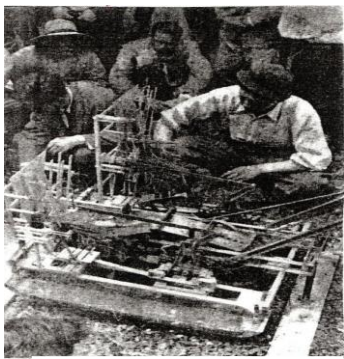
（農家の人たちの現実は……。）  
春三さんは、設計図を前にしばらく考え込んでしまいました。

結局、春三さんはいくつもの特許を取り、何度も試作機で実験をくり返しましたが、田植機の実用化は成功しませんでした。しかし春三さんの研究を引き継いだ佐藤造機（現三菱農機）が昭和四十五年に実用化しました。その頃、他のメーカーからも自動田植機が開発され、それまでの田植えの作業が大きく変わりました。

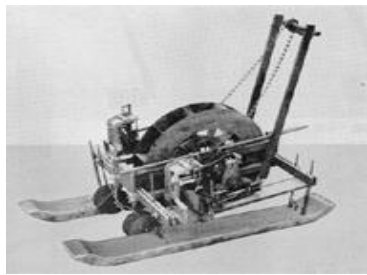
現在、日本の水田の99%で田植機による田植えを行っています。「二反田式田植機」は実現しませんが、田植機開発の先駆者の一人として、二反田春三さんの名前は今でも残っています。



二反田春三さんと  
孫の正さん



田植機の実験の様子



二反田式田植機